

事ふ如にせり、人の性の善なる、さばかりの無頼無法のものなれ共、其順孝に感じ、死期近くなりし時、手を合て涙を流し、子亭に謝せり、子亭も共に落涙しけり、段々病氣重り終に死せり、子亭又又心を盡し取しまひ、厚く葬りけり、

不悌

〔日本書紀應十〕九年四月、遣武内宿禰於筑紫、以監察百姓、時武内宿禰弟甘美内宿禰廢兄、即讒言于天皇、武内宿禰常有望天下之情、今聞在筑紫而密謀之、曰獨裂筑紫、招三韓、令朝於己、遂將有天下、於是天皇則遣使以令殺武内宿禰略○中 武内宿禰略○中 竊避筑紫浮海、以從南海廻之、泊於紀水門、僅得逮朝、乃辨無罪略○下

〔大鏡五太政大臣兼通〕この殿たちのあにをと、の御中としごろのつかさ位の、をとりまさりのほどに、御中あしくてすぎさせ給ひしあひだに、ほり川殿藤原兼通の御やまひをもくならせ給ひて、

今はかぎりにておはしまし、ほどに、ひんがしのかたに、さきをふをとのすれば、御まへに候人たち、たれぞなどいふ程に、東三條の大將殿藤原兼家まいらせ給ふと人の申ければ、殿きかせ給ひて、としごろなからいよからずしてすぎつるに、今はかぎりになりたると聞て、とぶらひにおはするにこそはとて、おまへなるくるしきものとりやり、おとのごもりたる所、ひきつくりひなどして、いれたてまつらんとてまち給ふに、はやくすぎてうちへまいらせ給ひぬと人の申に、いとあさましく心うくて、おまへに候人々も、おこがましくおもふらん、おはしたらば關白などゆづることなど申さんとこそ思ひつるに、か、ればこそ、としごろなからひよからですぎつれ、あさましくやすからぬ事なりとて、かぎりのさまにてふし給へる人の、かきおこせとのたまへば、中略うちへまいらせ給ひて、陣のうちはきんだちにか、りて、たきぐちのちんのかたより、御前へまいらせ給ひて、こうめいちのぎうしのもとに、さしいでさせ給へるに、ひの御ぎに東三條大將